月7日の夜に起きた地震は、東京都や埼玉県を中心に最大震度5強を記録した。東京23区でのこの規模の揺れは、2011年の東日本大震災以来のことだという。

翌日から国土交通省荒川下流河川事務所のツイッター投稿が話題になった。東京都江戸川区小松川のある地点の固定カメラが記録した地震発生時の編集動画だ。水中の魚が一斉に跳ねて川面におびただしい波紋を作った後、川岸の鳥が一斉に低く対岸へ飛び立つ。ふだんは見えない存在が地震によって表に引き出された動画はとても面白かった。

地震のP波に反応する魚とS波に反応する鳥の対比の妙はさておき、なぜ面白かったのかを考えつつノーベル平和賞の発表を見る。今年はフィリピンのドゥテルテ政権の強権性を批判してきたマリア・レッサ氏と、ロシアのプーチン政権による人権侵害を暴いてきたドミトリー・ムラトフ氏が選ばれた。夜の川に住む魚と鳥の姿を地震の力が可視化したのと同じく、社会の見えない権力構造を可視化するのは2人のような記者の力なのだろう。見えないものが見えるようになるのは無条件に面白い。だが、そこに懸けられるものが記者の命であってはならない。では、誰もが自らの目でこの世を一心に見つめていれば、この権力構造は見えるものなのか。それも難しい。ならば、人間の歴史がのこしてくれた類型を学び、推測することで見えないものを自らつかむ訓練をしてみよう。

加藤陽子の
近代史の扉

［謀略と世論］

政治家を葬ろうとした旧陸軍

総選挙も近いので、今回は謀略と世論について考えておく。今月10日の外電はオーストリアのクルツ首相が辞意を表明したことを伝えた。2016年から18年にかけ、自らに有利なように調整した世論調査結果をメディアに掲載するために公金を使った容疑という。同様の事例を今の日本について資料から論じるのは困難なので、戦前期の陸軍が国内政治に行った謀略の事例を紹介して代えたい。

時は岡田啓介内閣。1936年の2・26事件で青年将校に殺害されたと一時は誤報された、あの岡田首相の内閣だ。事はその少し前の34年に起きる。元憲兵曹長・野島尚明が東京憲兵隊に検挙されたのだ。嫌疑は「逆賊岡田・床次（竹二郎逓信相）を征討せよ。皇国の大義潰滅に瀕す」と題した怪文書を配布したことによる。当時、検事として事件を担当した木内曽益の史料が、国立国会図書館憲政資料室にのこされていた。

左下は、前列左から張学良、1人おいて蔣介石。右下は、満州事変で張学良の本拠地・北大営に入る日本軍

史料からは、陸軍が、帝国議会で審議予定だった満州（中国東北部）の機構改革問題に関し、軍部の主張を貫徹させるため、岡田内閣の副総理格だった党人派の重鎮をおとしめようと謀略を図ったとわかる。狙われたのは床次逓信相で、そのスキャンダルを捏造した怪文書の作成には、陸軍省調査班の田中清少佐と同省軍務局国内班長・池田純久少佐らが関与していた。

怪文書には何が書かれていたのだろうか。そこには、28年12月、床次が中国各地を歴訪し、蔣介石や張学良と会談した旨が記されていた。ここまでは事実だ。続けて文書は、床次が自らの配下の代議士2人の名前で張学良から50万元を借り、そのかわり学良の「排日」工作に手を貸したとの虚構を述べたてていた。近年でも、「反日」や「媚中」というレッテルで相手をおとしめることは可能だ。まして戦前期に、日本による鉄道敷設計画に反対していた張学良に金を借り、しかも彼に手を貸したとのデマは、床次の政治生命を絶つのに十分だっただろう。

怪文書事件が起きた34年時点では、31年の満州事変の決着は既についており、張学良は中国東北部のトップの地位から降りていた。だが当時の日本国民は、満蒙問題の根幹に張学良の悪政があったと信じ込まされていたため、彼に手を貸すような政治家は売国の徒と同類と見なされた。

当時の陸軍の謀略を見ていてひやりとさせられるのは、虚と実の混合具合の巧妙さだ。2人の代議士が学良から借金をしていたのは事実で、借用書も本物だった。木内検事が作成した代議士らの聴取書によれば、彼らは満州での自らの事業のため借金をしていた。陸軍は、満州事変時に張学良の本拠地・北大営を攻撃した関東軍の手を経て、学良の金庫にあった多数の証文類を手に入れていた。

再び34年当時の政界に話を戻せば、この時は立憲政友会と立憲民政党の2大政党の連携による政党政治復活が真剣に模索されていた時期にあたる。陸軍の直接の狙いは在満機構改革案を迅速に成立させることにあったが、実際の謀略の深度は深く、政党内閣復活の芽がここで一つ潰された。

世論を操作する方法としてこのような謀略がなされた事実と類型を覚えて備えておくのはきっと役に立つ。不幸なことだが。

（第3土曜日掲載）

かとう・ようこ　1960年生まれ。東京大教授（日本近代史）。著書「それでも、日本人は『戦争』を選んだ」「戦争まで」など。